

早稲田大学大学院日本語教育研究科

修士論文概要書

論文題目

日本語の授業活動の具現化過程に

教室空間はどのように関わるか

—「ボランティア参加者」が捉えるグループ活動の諸相—

伊吹 香織

2015年3月

序章

これまで日本語教育では、授業が行われる教室空間の重要性や物理的環境がいかにあるべきかにあまり関心が寄せられてこなかった。本研究は、田中（2014）の「どのような教育を実現したいのか、また実現すべきなのか、というそのヴィジョンとの関係においてしか、最適な環境を決めることはできない」（pp.56-57）という課題を受けて、日本語の授業活動に教室の物理的環境がどのように関わるのかを明らかにし、日本語教育が目指す教育を環境とともににどのような考えていくべきかを考察する。

第1章 問題提起と研究課題の設定

初級クラスでの授業活動を、教師である筆者の視点から分析し、考察する。什器の配置等物理的環境を変化させることで、教師の目指す授業でのコミュニケーションのあり方を具現化していった過程を示す。これによって、物理的空間を含めて日本語の授業活動を具現化することの重要性を示し、問題提起する。本研究の課題と立場は以下の3点である。

1. 日本国内では、明治以降の近代教育で整備され固定化された教室空間（「従来型教室」と呼ぶ）が日本語教育でも採用されている。固定化された従来型の教室空間には、教育分野と学校建築分野の研究が分断された関係にあることが見出される。両分野をつなぐ研究の必要から、日本で広汎に採用されている従来型教室において日本語の授業活動がどのように具現化されているのかを明らかにする
2. これまで日本語教育では、教材や方法は様々に研究されてきた。しかし、本研究では教材や方法はたたき台であるとし、授業時間にどのようなコミュニケーションが起きているのかという具現化のレベルで日本語授業や教育のあり方を問う必要性を提示する。
3. 本研究では、人は相互主観的にコミュニケーションを行い（アーペル 1986a）、日本語クラスを「コミュニケーション共同体」（アーペル 1986b）として捉えるというコミュニケーション観・教育観に立つ。よって、授業は教師1人が執り行うものではなく、クラスという共同体に参加する者全てが具現化に関わり、授業を行っているとする。

また研究にあたっては、初級クラスの事例における分析・考察の問題点（「データの単一性」「分析対象の単一性」「調査者の視点の単一性」）を再考し、「単一性」に陥らないために、多角的な視点による多元的な分析を行う方法を検討する。

以上を踏まえ、従来型教室で行われている複数の日本語の授業を調査対象とし、参加者が主体的に行う活動に焦点を当て、授業活動が教室空間も含めてどのように具現化されているのかを参与観察と参加者へのインタビューによって明らかにする。活動の具現化において、参加者は物理的環境をどのように捉え、どのような原因によって問題が生じ、どのように問題を克服しようとしているのかを分析する。以下にリサーチクエスチョンを設定する。

RQ 1. 参加者は物理的環境を含めて授業活動をどのように具現化しているか。

RQ 2. 活動の具現化においてどのような問題が起き、参加者はどのように対応しているか。

RQ 3. 参加者は日本語授業をどのような場と捉え、活動を通して何を実現しようとしているのか。

第 2 章 先行研究

学校空間や教室空間に関する研究を 2 つに分けて紹介し、先行研究から受けた示唆と本研究の枠組みを示す。

1 つ目は、新しくデザインされた学びの空間におけるプランナー視点による研究で、美馬・山内（2005）による「はこだて未来大学」と、山内（2010）などによる「駒場アクティブラーニングスタジオ」を取り上げる。使用者が教育や学習にとっての物理的環境を考え、教育観・学習観を見直す橋渡しをするというプランナーにとっての課題からは、物理的環境を授業の一部とし、「そこで行われる教育」を考えることの重要性が示唆されている。従来型教室を研究する場合にも、「そこで行われる教育」を考えることの重要性は同じである。

2 つ目は、学習者の視点による状況的学習論を枠組みにした柳町（2006）（2009）の授業研究を取り上げる。柳町の授業研究では、学習者が物理的空間を含めて自己の学習を組織化していく様子が見出され、学習者や教師など授業を行う内部者の視点でしか捉えられない物理的環境の意味が示されている。しかし、本研究は授業を行う集団にとっての教室空間の研究であるため、内部者の視点を受け継ぎつつも、柳町とは異なる枠組みで授業を捉えることとする。即ち、日本語のクラスを「コミュニケーション共同体」として捉え、活動に参加することは「コミュニケーション共同体に参加することである」という枠組みを採用する。

第3章 研究方法

学習者が自らの学習目的や興味に合わせて授業選択ができるカリキュラムを採用する X 大学の日本語プログラムを調査フィールドとした。また、日本語プログラムの拠点である Y 棟に設置された従来型教室で行われる日本語の授業を研究対象とした。また、学習者が主体的に行う活動を含む授業で、授業に参加し学習支援を行う「授業ボランティア」を採用する 6 つの授業を選定した。2014 年春学期（15 週間）を通して授業活動に参加しながら参与観察を行った。

ボランティアとして参加する調査者自身の位置付けは、メリアム（2004）の参加者の取りうる立場についての議論をもとに検討し、ボランティアという役割で徹底して授業に参加することから「徹底した参加者」という関わり方で、授業内部者の視点からデータ収集を行った。分析のもととなる主要データは、毎週の授業後に作成したフィールドノート、および学期の終盤にかけて行った教師や受講生など授業参加者への半構造化インタビューである。また、授業の配布物、オンライン掲示板、E メールでのやりとりなど関連資料も分析の参考とした。

6 つの授業分析を進めるうちに、3 つの授業（クラス 2、クラス 3、クラス 6）で同タイプの活動（ディスカッション活動）が行われ多くの関連が見出された。そこで、3 クラスに絞って分析することにした。異なる活動を別々に示せばそれぞれが単なる事例に過ぎない。しかし、同タイプの活動に焦点化すれば、活動中に起きる問題や工夫、方法の違いなどを比較対照しながら、あるタイプの活動への物理的空間の関わりを多元的に分析・考察できる。それによって、クラスで起きる現象により重層的な意味を見出せるためである。データ分析の方法については、佐藤（2008）の定性的コーディングを参考に、「脱文脈化」と「再文脈化」（p.45-53）を行った。

第4章 分析結果

4.1、4.2、4.3 では、RQ1 と RQ2 に基づいて、3 つのクラスのグループ活動を分析した。

クラス 2 では、「互いをリソースとしていろいろなことを知り、自分も発信していく」というコンセプトで、グループでのディスカッション活動が授業の中核となる活動として行われていた。グループ分けについては、人数、受講生のバックグラウンドやトピック性を考慮するだけでなく、文化や習慣を国や地域ではなく個人に属するものとして個を相対化した議論が行われるような工夫がさなれていた。また、初級・初中級というレベルにも

起因する問題に対処するため、ディスカッションへの介入や資料提供、ボランティアの配置換えなど調整が行なわれた。毎回の授業で行っていたグループごとの「島」にする机の配置替えは、グループ分けとともに、活動中にさまざまな調整を行っていく上での土台となっていた。「みんながその輪の中において、みんなが参加する意識を持つ」という活動のあり方は、グループ分け、机の配置替え、また活動中の調整によって具現化されていた。

クラス3では、段階的に「一から多へ」話せるようになるという意図のもと、話す相手や話題の広がりや情意面でのサポートを重視しながら授業がデザインされていた。グループ活動において、個々の参加者に対する調整やサポートを必要としている点においては、クラス2との共通点がみられた。しかし、クラス2がレベル差を埋めていくような工夫をしていたのに対して、クラス3では、レベル差を利用して活動への参加動機を高めるという調整の仕方も見られた。また、ペアワークとグループワークがクラス2に比べて少人数で行われていたことや、話す相手を何度も変えるという活動の流れもあり、クラス3では一斉授業の机配置を変えずに行っていた。ただし、クラス2、3とも、ディスカッション活動を行う中で必然的に生まれる音がコミュニケーションの妨げにもなる問題が指摘された。音の問題は部屋そのものの広さだけでなく、机配置が規定する活動空間の広さも原因になっている。また、クラス2やクラス3よりもはるかに広い教室を使用しているクラス6においても、グループ・ディスカッションで生じる周囲の音が問題となり、小さい声で話すと聞こえず大きい声で話すと周囲がうるさくなりすぎるというディスカッション活動のジレンマが明らかにされた。

3つのクラス全てにおいて、集団の人数は問題となっていた。特にクラス6においては、170名あまりの大規模集団で、動き回る余裕がほとんどない一斉授業の机配置の教室で、グループディスカッションをどのように行っていくかが参加者によって試行錯誤された。出席カードによる着席位置とグループを指定する方法でグループ作りの調整が行われたが、すべての参加者がその方法を受け入れているわけではなく、着席位置を選べないのは問題だとする意見も聞かれた。また、グループ活動で生じる問題には、物理的空間的問題だけでなく人間関係の問題も見られた。活動がどのような状態で行われ、どのような問題が起きているかは、時間の流れの中でも変化していった。そして、上手く具現化されない活動にも学びがあり、より良い授業とは何かを追究していく中にこそ主体的な活動がもたらす学びがあるという意味づけもされた。

4.4ではRQ3に基づいて、3つのクラスの参加者が日本語授業にどのような意味を見出

し、何を実現しようとしているのかを分析した。3人の教師の語りからは、多様なバックグラウンドを持つ者同士がコミュニケーションをどのように実現していくかという日本語教育の課題に対して、それぞれの教育の実現が目指されていた。また、受講生を初めとする他の参加者の語りからは、『コミュニケーション共同体』への参加「異文化交流」「人と出会い関係を築いていく場」「逸脱による学び」という4つのタイプの日本語の授業の意味と実現されている教育のあり様が浮かび上がってきた。

第5章 考察

授業活動と教室の物理的環境との関係を Barker (1968) のシノモルフィという概念を用いて考察し、両者が適合した状態である「シノモルフィが再構築される」(平田 2007, p.143) 状態の意味を検討した。活動と教室空間のシノモルフィックな関係とは、固定されているのではなく時間軸の中で流動的にとらえられるものである。授業を行う参加者の一刻一刻の変化が、シノモルフィックな関係とは何かを決め、具現化された状態を評価していく。また、「シノモルフィが再構築され」た状態が必ずしも教育の改善につながるわけではなく、それは到達点でもない。日本語教育側からは、活動の具現化過程に関わる全ての要因を見極めていき、授業を行う内部者であるからこそ問題の要因を見極められる視点によって物理的環境も捉えていくことが、より良い授業実践の実現につながる。

さらに、本研究ではインタビューデータを取るに至らなかったが、授業科目が属する教育組織やシステム、その関係者といった「見えない参加者」が、授業活動の具現化に与える影響を検討した。授業を行う参加者と「見えない参加者」との希薄なつながりは、両者が同じ教室空間を異なる価値観で見ることにつながり、それは教育自体の問題として現前化するのではないか。両者が共通認識を持って授業活動のより良い具現化を考えていかなければ、教育の改善は望めない。

第6章 結論

学習や教育にとっての物理的環境の重要性を再度確認し、日本語のコミュニケーション教育でこそ活動が物理的環境を含めてどのように具現化されるかを問い続けるべきであるとした上で、本研究を行った意義は、以下の3点にまとめられる。

- 1) 同タイプの活動に焦点化し、3クラスの授業を比較対照し類似点や相違点を多元的に分析したことで、それぞれのクラスで起きる問題や問題への対処に重層的な意味を見出した。

- 2) 先行研究ではあまり取り上げられていないが、国内の学校教育で広汎に使用されている従来型教室を対象とし、身近な教室空間で行われる活動と教室空間との関わりを明らかにした。それによって、教室空間を初めとする学びの物理的環境が全ての教育現場において問われるべきであるとした。
- 3) 日本語クラスを「コミュニケーション共同体」と捉え、共同体にとっての日本語教育実践が具現化のレベルで問われる必要性を、参加者心理を含めて具体的な活動を詳細に描きながら示した。これにより、教育工学や建築計画分野とは異なる、日本語教育側の視点に立った教室空間の質的研究例を提示した。

また、以下の4点を今後の研究課題とする。

- 1) 本研究で取り上げることのできなかつた日本語授業で行われている様々な活動に焦点を当てた研究と、より多角的な視野に立つための研究方法を検討する。
- 2) 従来型以外の教室や、それぞれの日本語教育現場における学びの空間も対象とした研究を行う。
- 3) ICTの普及による非対面授業における授業の具現化と学習環境との関わりを検討する。
- 4) 日本語の授業をとりまく組織やシステムなど「見えない参加者」を含めた研究を行う。

参考文献

- アーペル, カール-オットー (Apel, K.-O.) (1986a) 「言語コミュニケーションの超越論的構想と第一哲学の理念」(平岩隆敏訳)『哲学の変遷』(磯江景孜他訳) 二玄社 (原著は 1976)
- アーペル, カール-オットー (Apel, K.-O.) (1986b) 「コミュニケーション共同体のアプリオリと倫理の基礎」(磯江景孜訳)『哲学の変遷』(磯江景孜他訳) 二玄社 (原著は 1973)
- 佐藤郁哉 (2008) 『質的データ分析法—原理・方法・実践—』新曜社
- 田中彰吾 (2014) 「身体知としてのアフォーダンスと学校空間論」学校空間研究者グループ編『学校空間の研究—もう一つの学校改革をめざして—』コスモス・ライブラリー, pp.48-58
- Barker, R. G. (1968) *Ecological psychology: Concepts and methods for studying the*

environment of human behavior. Stanford, CA. Stanford University Press

平田乃美 (2007) 「教育環境—教師と子ども、学びのための環境研究—」 佐古順彦・小西啓
史編『環境心理学』朝倉書店, pp. 127-148

美馬のゆり・山内祐平 (2005) 『「未来の学び」をデザインする：空間・活動-共同体』
東京大学出版会

メリアム, S. B. (Merriam, S. B.) (2004) 『質的調査法入門—教育における調査法とケー
ススタディー—』(堀薫夫・久保真人・成島美弥訳) ミネルヴァ書房 (原著は 1998)

柳町智治 (2006) 「教室における知識・情報のネットワーク：入門フランス語クラスで
の調査から」 上野直樹・ソーヤーリエコ編『文化と状況的学習：実践、言語、人工
物へのアクセスのデザイン』凡人社, pp. 154-170

柳町智治 (2009) 「ハイブリッドのデザインとしての教室そして学習者」 小林ミナ・衣
川隆生編『日本語教育の過去・現在・未来〈第3巻〉教室』凡入社, pp. 142-160

山内祐平編著 (2010) 『学びの空間が大学を変える—ラーニングスタジオ／ラーニングコモ
ンズコミュニケーションスペースの展開—』ポイックス